

母はほめてくれた

辻 憲男 (文学部教授)

須賀敦子が入学した小学校に、偶然同じ時に遠藤郁子という音楽の先生が赴任した。先生も毎朝、阪急夙川から小林(おぼやし)までかよった。郁子には男の子が二人いた。兄はとびきり優秀で、弟は雨の日に傘をさしてアサガオに水をやるような子だった。郁子は「兄は秀才だけど、周作は天才よ」と言って、「文章を書いたり、話をするのが上手だから、小説家になったらいい」とほめた。それで小説家になったのでもないが、「母は私と一緒に本を読んでくれて、こんな風景の書き方があるが、面白いでしょうなどと語ってくれた」。郁子は学生時代に恋愛結婚をしたが、周作が10歳の時に離婚し、教師をしながら息子たちを学校へやっただ。一日に4~5時間はバイオリンの練習をし、冬には指が切れてピッピッと血が飛び散るほどだった(「母と私」ほか)。

母は熱心なカトリック信者になった。仁川(にがわ)に引っ越してから、周作は勉強を怠け、三宮へ出ては映画を観た。苦しい受験浪人の間も、小説を読みあさった。仁川の風景は後の自作「黄色い人」に描かれている。けっきょく母から離れて東京へ出た。母を捨てた父のもとに、兄弟ともに身を寄せた。戦時中も、母は仁川で孤独に生きた。戦後、周作はフランスに留学したが、そこで結核を発病した。帰国した年に母は58歳で急逝した。死に目に会えなかった。

母をモデルにして小説を書きたいと思いながら、長い間果たせなかった。



小学生の遠藤周作が洗礼を受けた夙川カトリック教会。